

一般に文楽というと、3人の男性が1体の人形を遣う人形芝居だが、昭和初期から戦前にかけて、大阪で生まれ庶民に愛されたもうひとつの文楽があった。「乙女文楽」である。

女性一人で一体の文楽人形を操る。人形の首（かしら）は遣い手の頭と紐で結ばれ、遣い手の頭の動きがそのまま人形の顔の動きになる。人形の両手は遣い手の腕に付けた「腕金」と腰で支え、人形の足は遣い手の両膝で操る。人形は衣装によっては8キロ以上の重さになり、女性一人で支えるには、体力と技術が必要だ。

吉田光華さんが乙女文楽と出会ったのは、子育てが一段落してようやく自分の時間を持てるようになった頃。戦前活躍した吉田光子さんに師事、吉田光華を襲名したが、あくまで趣味と考えていた。

3歳から日本舞踊をはじめ12歳で若柳流名取になるほど踊りが好きで、そのしなやかな動きが、上方落語の重鎮、故5代目桂文枝さんの目に留まった。「天神山」の落語で一緒に出演してほしいと頼まれたのがプロ入りのきっかけとなり、桂文枝さんとの共演で数々の舞台を重ねた。

「小さい頃、母にあの人

形が欲しいとねだったのが文楽人形でした」と微笑む。人形の衣装、髪型や小物、そして振り付けと、自分で創作する。「演じている時は一心同体で、私の踊りが人形の動きになります。でもその日によって、人形が思うように動いてくれなかったり、人形の方が先に踊り出すような時もあるんですよ。」

女性一人遣いならではの柔軟さが魅力である。義太夫はもとより長唄・小唄・歌謡曲・琴・筑前琵琶・民謡・尺八とあわせて...だけではない。文楽の吉田文吾氏やモダンバレエ、東方女子楽坊とのコラボレーション、椎名林檎のCDアルバムのCM出演、雑誌グラビアへの人形の掲載など、幅広いジャンルで活躍している。

数少ない乙女文楽のプロとして、地方や海外の公演も多い。来月は「ワールドミュージックフェスティバル」でオランダを中心に10ステージが予定されている。

「乙女文楽を通じた人との出会い、ご縁をととても嬉しく思います」。優しさに満ちた笑顔と秘められた情熱。人形の舞がかもし出す甘美な世界をじっくりと味わいたい。

中央区の天満橋南詰めに「八軒家浜」船着場が開港した。

八軒家浜は、かつて淀川舟運の大阪の玄関口であり、熊野参詣への出発地点として、また伏見と往復する三十石船をはじめとする水上交通の要所として賑わい、八軒の船宿があったことから名前が付いた。

水都再生への取り組みの一環として、まずは船着場が3月29日に完成。継続して遊歩道や公園の整備、水上交通の充実を目指す。開港を記念して、八軒家浜発着の「大川さくらクルーズ」が新たにお目見え。25分間でOAP周辺まで往復する。川沿いの桜並木は舟上から意外と近く、手軽に花見が楽しめる。他にも水上を動くカフェバー「龍魚(ドラゴンフィッシュ)」、ミナミと結ぶ「カナルシャトル」、水上バス「アクアライナー」など種類の異なる船が頻繁に行き交う光景が新鮮だ。

NPOや複数の舟運事業者が手を組み、府市共通の河川運航ルールを決め、利用窓口を一本化した。周辺住民を中心とするプロジェクトや関係企業も、イルミネーションに寄付協力を行い、昼夜違った表情が実現。今秋に開通する京阪電鉄中之島線の改札口と直結する

計画だ。09年実施が予定されるイベント「水都大阪2009」のメイン会場の一つにもなる。

大阪市の中で、水辺はその1割を占める。日本の都市ではダントツであるが、水都のイメージは乏しい。水質の更なる浄化と同時に、水陸の「足」をつなぎ、移動の時間を楽しく感動をもって過ごすための、独自のプログラムソフトが必要である。四季の演出、食、アート、ユニークな地元ガイド等によるエンターテインメント性豊かな“大阪物語”体験の機会を常に提供できる仕組みが求められる。

水都の象徴として蘇った「八軒家浜」。大阪人自身が水都の歴史や水辺に関心を持つ契機づくりとしても、水陸双方を交遊できるような、魅力的な企画や運営が期待される。

「ここで、曲名あてクイズです。チェロのパートを聴いて何の曲を弾いているかお答えください」。カノン、白鳥の湖、スタンドバイミーなど、馴染みの曲が続き、満員の客席は歓声や笑顔に包まれた。

「大大阪の夜、レトロコンサートシリーズ、芝川ビルへようこそ」と題した、弦楽三重奏による音楽会でのひとコマである。レトロな近代建築ビルで食事やコンサートを楽しむシリーズで、先月の舞台は、淀屋橋のオフィス街にたたずむ芝川ビル。1927年に建築され花嫁学校でもあった。地下のベトナムレストランでの貸切ディナーと屋上でのアットホームなコンサートで、優雅な夜のひと時が提供された。

この催しは大阪商工会議所主催の「ナイトカルチャー事業」の一環で、夜の文化魅力開発を通じて、大阪の賑わいづくり、活性化を目指すものである。

ライトショーと飲食店を連携させ、夜型エンターテインメント、観光メニューとして、プログラムを開発。上方伝統芸能のエッセンスを紹介するパフォーマンスや近代建築を活用したコンサートをはじめ、大阪城では野外映画祭や2万個の行灯でのライトアップを

開催するなど、回を重ねるごとに人気が高まっている。

「ミッドナイトチェックイン制度」も嬉しい。大阪の主要98ホテルに当日午後11時以降に予約すると宿泊料金が最大82パーセント割引になる。深夜まで都心で過ごして終電を逃しても、かなりお得な値段で快適な夜が過ごせる。

大阪で住み働く人々やビジターが、安心して楽しく文化的なナイトライフを過ごせるような街づくりを目指す。しかし魅力的な「場」やプログラムソフトの数はまだまだ少なく、プロや若手アーティストが活躍する機会ももっと必要である。

夜になると、街角のあちこちで音楽や拍手が漏れ聞こえるような大阪を目指して、さらに抜本的な取り組みが期待される。

「おもろうて、やがてしんみり(感動)」こんな体験を大阪で常に提供したいと、まち歩きを中心とした“なにわ名物ガイドツアー”が検討されている。

平成19年度、国土交通省は国土施策創発調査として、「地域資源活用・ネットワーク型の新たな観光サービスシステムの創造による潜在的な国内旅行需要の喚起・顕在化を通じた地域活性化方策」のための調査を実施。観光の切り口から地域活性化への検討を行った。

私が主に関わった「大阪ワーキング」では、主に団塊世代を対象に、エンターテインメント性豊かなガイドによる参加体験ツアーの立案・実施を行い、同時にプログラムを提供する仕組みも議論し構想をまとめた。

大阪は、個性豊かな中小の「まち(エリア)」の集積であり、各々独自の文化や活動団体をもつ。が、その豊かな資源力を十分に活かしきれていない。まち歩きや観光の商品としての潜在力を見直し、ユニークな解説付き体験型のツアーとして再編集すれば、ビジターはもちろん地元の人も、地域魅力の再発見を楽しめる。

調査の中で、4つのモニターツアーを開催。例えば「文楽とミナミのお茶屋遊び体験」では、文楽公演の

一幕見、人形遣いによる解説や舞台裏の見学を行い、その後、島之内の老舗の茶屋で、食事とお座敷遊びを体験。ミナミの粋な遊びを堪能するツアーだ。他にも、北新地の高級文化サロン体験、大大阪レトロ建築まち歩き、東横堀川界限歴史とまちづくりに出会うツアー等を実施。いずれも好評ながら、細やかな配慮をプログラムに盛り込む必要性が課題として抽出された。

マネジメントや人材育成の仕組みを構築すれば、地域が自らプロデュースしたツアーの常設が可能になる。まちを愛するキーマンが随所に顕在している大阪なら実現できるはずだ。

地域も人も元気にする、コミュニティ主導型のツーリズム展開を目指し、今年度も取り組みは続く。